

唐都青竜寺詩初探

植 木 久 行

一、青竜寺の盛衰

大唐の都長安城内左街の新昌坊にあった青竜寺⁽¹⁾は、わが国の空海⁽²⁾（八〇五年）、円行⁽³⁾（八三九年）、円仁⁽⁴⁾（八四一年）、円珍⁽⁵⁾（八五五年）らが相繼いで灌頂を受けた、いわゆる東密・台密の揺籃の地として特に著名であり、中晚唐期、恵果（空海の師）・義操・法潤・円鏡・義真（円行・円仁の師）・法全（円仁・円珍の師）などの密教の碩匠が次々と輩出し、都における密教弘布の中心であった。代宗以降の皇帝の尊崇もとりわけ深い。青竜寺の前身となる靈感寺は、隋の新都大興城（^{だいこうじょう}唐長安城）のほぼ完成した開皇三年（五八三）、新都内にあった昔の陵園・塚墓を土地の造成のために掘りかえし、それらを一括して埋葬・供養するために特に設けられた官寺であった（『宋高僧伝』卷二四「唐上都青竜寺法朗伝」）。新昌坊の地が選ばれたのは、やはり前代の墓葬が特に多い高燥の台地であったためであろう。

この隋代の靈感寺は新昌坊の東南隅（隅は坊の四分の一の広さを指す）のうちでも主に西部に位置していたらしく、

塔を中心とする前塔後殿の建築様式であった。その塔は一辺の長さ一五メートルの方形の木塔であり、その前（南）には中門・山門（南大門）があったと推測されている。⁽⁴⁾ 靈感寺は唐初の高祖武徳四年（六二一）に一時廃絶し、約四十年後の竜朔二年（六六二）、高宗の同母妹である城陽公主の発願によって再興された。前掲の「法朗伝」によれば、竜朔二年、城陽公主が重い病にかかったとき、妹思いの高宗によって召された法朗が『観音経』を誦^とえて公主の病をなおした。それで公主はその恩に感じて観音寺と改称して法朗を住まわせたという。法朗入滅後の寺の状況は明瞭でなく、睿宗^{えいそう}の景雲二年（七一一）には、青竜寺と改称された。その名称は、寺が都の東部にあることと関係するか（青竜は東方を司る星の名で四神の一）。ちなみに、寺のある岡が「青竜岡」（白居易「題新居寄元八」詩）と呼ばれたのは、おそらく青竜寺と呼ばれた以後のことであろう。「経律を洞^{ふか}く明^きり、その禅観を善く」した光儀が観音寺時代から止住し（七三五年没、『宋高僧伝』巻二六）、また玄宗の開元十八年（七三〇）、二教の優劣を定めようとしたとき、道士の尹謙^{いんけん}を屈服せしめた僧侶が青竜寺の道氤^{どういん}であった。道氤はまた玄宗の命をうけて『御注金剛経疏』六巻を撰し、それを講じたときには、聴衆が千人を数えたという。『宋高僧伝』五では、さらにその学徳を慕って天下の「学徒鱗萃^{りんすい}」したとも記す。

代宗・徳宗・順宗の帰依を受け、三朝の国師と仰がれた青竜寺和尚惠果（七四六～八〇五）のとき、寺は極盛期を迎えたらしい。代宗のために祈禱法要を修した惠果は、大暦十年（七七五）、東塔院を賜わり、毘盧遮那灌頂道場^{びるしゃな}を設けた（『大唐青竜寺三朝供奉大徳（惠果）行状』⁽⁶⁾）。青竜寺の寺域は新昌坊の四分の一（東西約五〇〇、南北約二五〇メートル）とされるが、西部から東部へと次第に開けていったらしい。王維の詩序（後引）に、玄宗期の曇壁上人^{どんげき}が「大いに蔭（木かげ）中を開い」て僧房を作ったというのも、この東部地域への発展を意味しよう。ちなみに、長安の整然とした都市形態を描写する「百千の家は棊^まを囲む局（棊盤）に似たり、十二の街は菜を種^うる畦^ゐの如し」の句で知られる白居易の「観音台に登りて城を望む」詩の観音台とは、青竜寺の楼台の一つであろう。前掲の惠果の「行状」に、惠果

が觀音、台で祈ったところ、觀音菩薩が現われたとある。青竜寺付近は後述するごとく、長安城内有数の展望台として知られ、青竜寺が觀音寺の改称であることも注意されてよい。惠果の弟子には弁弘・惠日・惟上・義円・義明・空海・義満・慧則・義操などがあり、寺の法燈は惠果から義操・義真へと受けつがれて、いつも「簪組（貴顕）の客」が多かったという（劉得仁「青竜寺僧院」）。

唐の裴庭裕『東觀奏記』卷中には、

上（宣宗）至孝にして、動に元和（憲宗の年号）の故事に遵ふ。憲宗曾て青竜寺に幸せしを以て、命じて複道に便門（通用門）を開いて、青竜の仏宮に至らしむ。

とあり、皇帝の尊崇も依然として厚かった。文中の便門は、北宋の呂大防の題記によれば、長安東南隅の離宮芙蓉苑と真北の青竜寺とを結ぶ道のために開設されたものであり、俗に新開門と呼ばれたという。また複道とは城壁に平行して作られた天子専用の高架道をいい、夾城とも呼ばれる。北部の大明宮や興慶宮と南端部の芙蓉苑とを結ぶ夾城が開元二十年（七三二）に長安城の東壁ぞいに作られている。青竜寺に向かう専用の便門がその夾城の一角に特に設けられたのは、いうまでもなく寺に対する皇帝の尊敬の念を表すだろう。この結果、新昌坊以南の四坊が二分されたといひ（呂大防の題記や程大昌『雍錄』の図など）、福山敏男の論文もこれに従うが、今日なお未確認のままである（発掘調査）。ただ近年の考古学的調査によって、従来曲江池の南とされてきた芙蓉苑（園）の位置が曲江池の北側から東側にとりまわることが指摘され、芙蓉苑の北と青竜寺とが曲江池を越えずに直接結ばれることが判明した。便門の開設を考へる場合、呂大防の題記の「宣宗修憲宗遺跡、於夾城中開便門」の語が改めて注目される。この憲宗の遺跡は平岡武夫の指摘するごとく、元和二年（八〇七）六月、左神策軍が「新たに夾城を築き、玄化門・晨耀樓を置いた」（『旧唐書』卷一四「憲宗本紀」など）ことを指すだろう。とすれば、憲宗が元和十二年（八一七）、右神策軍に命じて宮城の

北壁にそって西の方へ夾城を築き、修徳坊の興福寺に通じさせたことがおのずから連想されてくる。興福寺と青竜寺がともに長安城の外郭に直接臨む地にあるという共通点をもつことから臆測すれば、青竜寺の場合も、東側の夾城に便門を設けさえすれば最も簡便な専用道路となり、わざわざ四坊を二分する必要はなさそうである（この項、待考）。ただこの場合、便門の名を伝える新開門村が新昌坊のはるか南、敦化坊南の欠名坊の東南角に位置する（¹²）ことが改めて問題となろう。

ところで隆盛をきわめた青竜寺も、武宗会昌五年（八四五）の有名な廃仏事件によって章敬・安国の両寺とともに「内園」にされた（円仁『入唐求法巡礼行記』巻四）が、翌年即位した宣宗は都の中に八寺の復活を認め、青竜寺は護国寺と改称されて再興した（¹³）『旧唐書』巻十八下「宣宗本紀」、五月のこと。つまり青竜寺の廃絶期間は約一年にすぎず、寺の復興はかなり順調に進んだらしい。わが円珍の従学は廃仏後の大中九年（八五五）のことであり、さらに咸通五年（八六四）には、真如法親王（平城天皇第三皇子）が宗叡とともに円珍同様、法全から真言の秘法をさすけられている（¹⁴）。また北宋初めの銭易撰『南部新書』戊の条に、

長安の戲場は多く慈恩に集まる。小きき者は青竜、其の次は薦福・永寿。

とある記述は、会昌の廃仏後のことを述べたものとされる（¹⁵）。とすれば、青竜寺の戲場は慈恩寺につぐ規模を有し、参詣する善男善女を相手に芝居・演芸・雑戯（吞刀・吐火・弄丸の類）などを見せたことであろう。また日用雜貨などをあきなう里肆（坊中の肆）も門前や境内にあったはずである。当時の寺院は周知のごとく、民衆の文化センターとして娯楽・慰安・宿泊などの機能を持っていた。もちろん一般民衆に対して因縁説話を平易に講唱する俗講もかなり行なわれたことであろう。ただ注意すべきことは、護国寺の名称が大中九年（八五五）再び旧称に復したという事実である。この指摘は加地哲定の「長安青竜寺の遺蹟に就いて」の論文のなかで、円珍の『批記集』の注に「大中九年七

月、本に歸りて青竜と号す」とある記述を踏まえてなされている。とすれば、護国寺としての期間は九年間にすぎず、廃仏以後も依然として青竜寺の名で登場するわけである。従って青竜寺は廃仏以後、詩人たちの眼から消えうせたとする説は誤りと思われる。ちなみに、『批記集』によれば、廃仏以後、寺の西南角の地に法全の住房、浄土院⁽¹⁷⁾が新たに建立されたことがわかる。

五代以後における青竜寺の存続状況は現在のところ全く未詳である。北宋の元祐元年（一〇八六）に成る張礼の「遊城南記」に青竜寺の名が見えるが、それは常盤大定の「我が東台両密の發源地たる唐の青竜寺につきて」に指摘されるごとく、十年前に成る宋敏求撰『長安志』巻九の行文を襲ったものであり、その存続を証明しうるものではない（五代以後、西安城は縮小され、青竜寺は城外となる）。明の万曆年間（十六世紀後半）に成る趙嶠⁽¹⁸⁾「訪古遊記」では、青竜寺の廃絶を明記する。ところが清の嘉慶二十四年（一八一九）に成る『咸寧縣志』は、青竜寺は石仏寺と名を変えつつも「今に迄るまで改められず」（巻三）とし、「石仏寺は即ち青竜寺」（巻二）のことと断言する。常盤大定の前掲論文が趙嶠の記述や石仏寺の位置によってその説を批判・否定したが、桑原隲蔵は「長安の青竜寺の遺址に就いて」などの論文のなかで、『咸寧縣志』に基づきつつ蔡台村にある石仏寺こそ唐の青竜寺の遺址であるとし、これは「動かし易からざる鉄案」であり、他日の科学的な実地調査によっても動揺する懸念は「先ず絶無に近い」と断言したが、近年の実地踏査・発掘によって石仏寺は新昌坊の西隣の宣平坊にあることがわかり、常盤説がほぼ立証された。ちなみに二十世紀初頭には、青竜寺の旧跡付近に寺の名残とみられる「地下の家」があり、中には「三土龕⁽¹⁹⁾があつて、中に粗悪なる塑像の仏像」が安置されていたという（常盤前掲論文）。黄土地帯に多い窑洞⁽²⁰⁾の一種であろうか。今日、青竜寺の遺址には恵果・空海記念堂や空海記念塔などが建立されている。

二、寺の位置と題壁詩

青竜寺のある樂遊原付近は南の曲江池や芙蓉苑・杏園・慈恩寺（大雁塔）などとともに、広々とした清澄な湖面を中心とする長安東南隅の景勝地を形成する。長安城内には、竜首原の支脈が東西方向に六条の高坡（台地）を作り出し、東南地域の地勢が最も高く、西北に向かって次第に低くなっていた。この六条の高坡は昔から六坡・六岡などと総称され、隋の著名な建築家宇文愷はこれを易の乾の卦に見たてて都城プランに生かしたという（『元和郡県図志』巻一の原注など）。なかでも最も南にある第六条の高坡（乾卦の上九に相当）は、有名な慈恩寺の大雁塔付近から東北に屈曲し、漢の宣帝の廟が置かれた樂遊原を通じて延興門外に伸びており、六坡のなかでは地勢が最も高く、標高四百四、五十メートルにおよぶ。このいわゆる上九の台地には、青竜寺のほか慈恩寺（晋昌坊）や竜華尼寺（昇道坊）などが建立され、緑濃き高燥の地であるため、避暑にも適しており、四季を通じて登眺の美を楽しめた。青竜寺の遺址は現在の西安城東南約三キロの鉄炉廟村北の高地にあたり、広義の樂遊原（別稿予定）の南斜面に位置していた。宋敏求『長安志』巻九に「北のかた高原を枕とし、南のかた爽塏を望み、登眺の美を為す」とある高原は、この樂遊原のことであり、また爽塏（高燥の地）とは都の南に横たわる終南山下の丘陵付近を指しているだろう。白居易の詩の「地高く長坡（長い岡）に倚る」（『青竜寺早夏』）という句は、青竜寺が樂遊原の南斜面に位置することをいい、李益の詩には「連岡 古寺出ゆ」（『与王楚同登青竜寺上方』）と詠まれている。

長安城内における新昌坊の青竜寺の位置を略述してみたい。⁽²¹⁾ 寺の境内は新昌坊の東南隅（隅は坊の四分の一）の全域を占め、寺の東端には前述の夾城が長安城の東壁（版築の土牆、高さ約五・三メートル）と平行して走り、また寺の南

は長安城の東西三門のうちで最も南の延平門と延興門を結ぶ幅五五メートルの大街（都大路）が坊牆（坊を囲む土塼）⁽²²⁾ごしに東西に走っていた。青竜寺の山門（正門・南門）はおそらく寺院の特権を生かして直接この（延平）延興門大街（六街の一つ）に臨んで建てられていただろう。寺の東南角に位置する延興門は幅六メートルの三本の門洞（通路）をもつ東西二一、南北四二メートルの堂々たる城門であり、高い城壁をそなえていた。門の付近には北の春明門付近と同様に緑眼白晳の胡姬の酌する酒樓が多かったという。⁽²³⁾これは当時の夜行の禁の制度などと関連し、従って延興門を入ってすぐ北に位置する青竜寺は交通の要衝として宿泊地としても利用されたであろう。寺の西と北は坊を四等分する、いわゆる十字街（幅は約一五メートル）が走り、新昌坊の名額をかけた坊門（坊への出入口）に通じていた。白居易が長慶元年（八二二）、五十歳のときに購入した新昌坊の家は、青竜寺から十字街を越えた真北に位置し、甘露の変（八三五）で殺された舒元輿^{じょげんよ}の邸宅も、その付近である。舒元輿の文によれば、十字街にのぞむ北門（後門）付近は境内で地勢が最も高く、「高く寶埃^{かんえ}（俗世界）より出絶⁽²⁴⁾」していたという（「長安雪下望月記」）。

青竜寺に触れる唐詩は三〇首以上におよぶが、その位置を記すわが国の注釈は、おおむね誤りか、極めて誤解をまねきやすい説明となっている。たとえば、小川環樹・入谷仙介他訳注『王維詩集』（岩波文庫）の注には、寺は「長安の南門の東側にあり……王縉^{おうしん}は長安の南門から出て藍田関を越えて旅立ったのであらう」とある（「別弟縉後、登青竜寺望藍田山」一七〇頁）。この説はおそらく清の趙殿成の箋注などに「長安志」を引いて「南門の東青竜寺」とある記述に基づいたものであらう。しかし『長安志』巻九の「南門」とは長安城（外郭城）のそれではなく、実は新昌坊の南門（東西南北の四つの坊門の一つ）を指している（王縉は長安城の東門へ延興門から出て藍田関に向かったと思われる）。他方、伊藤正文『審美詩人 王維』（集英社）は後引する王維の詩序を踏まえて、「終南山の中腹にあって、長安を遙かに控え、なかを渭水が流れるのが見わたされる景勝の地にあったと思われる」（二三五頁）とするが、青竜寺はすでに述べたこ

とく、長安城内の新昌坊にあった。寺が楽遊原の南斜面上部の高台にあったために、南の方は眼下の曲江池周辺はいうまでもなく、はるかな終南山の山なみもくっきりと見え、北の方は興慶宮・大明宮はもちろんのこと、渭水の北側に広がる台地に点在する漢の五陵や秦の咸陽宮の旧跡付近でさえもおぼろに見えたことであろう（李益の前引詩）。中晩唐の劉得仁は「青竜寺の僧院」詩のなかで、眺望に富む静謐で清浄な寺のたたずまいを、

此地堪終日　此の地　日を終ふるに堪え

開門見數峰　門を開けば　數峰を見る

苔新禽跡少　苔新たに　禽の跡少に

泉冷樹陰重　泉冷かに　樹の陰重なる

と歌い、盛唐の岑參は香煙のただよい、僧のたたく磬（銅鉢の類）のすずやかな音が朝夕にかそけく響きわたる寺内の様子を、

夕香泛窓戶　夕香　窓戸に泛び

幽磬清曉夕　幽磬　曉夕に清し

と歌っている（送青竜寺招提婦上人遠遊吳楚別詩）。

唐代の寺院には周知のごとく、すぐれた壁画が多かった。青竜寺の場合、「中三門（中門）の外の東西（の壁）は、王韶応の画」（『歴代名画記』巻三）で飾られ、さらに「（仏）殿の上の東西に相向かふ三神（像）は呉生の画」であったという。呉生とはいうまでもなく、玄宗の頃の著名な画聖呉道元のことである。また韓愈の詩句「光華　壁に閃いて神鬼を見る」（『遊青竜寺贈崔大補闕』）によれば、種々の神鬼像も描かれていたらしい。その一部は呉道元の描くものか。さらにはまた、北方の守護神である毘沙門天王の絵が寺の西廊の北壁に描かれ、まるで精彩動くがごとく、靈顯あら

たかで、人々が四方から御参りに集つてきたという（『太平広記』卷三二二所引『唐闕史』、新昌坊民）。今日、壁画の細かな残片が多く出土している。

当時の題壁の習慣（作品発表の主要方法の一）を考えるならば、中晩唐期、無可・馬戴・薛能・朱慶余・張祐・韋莊・盧駢・無名氏（『全唐詩』卷八七七）などの詩が寺壁に題されていたはずである（詩題による）。そのなかには、みずからの懷才不遇意識に基づく運命の恣意性や榮枯盛衰の不合理を慨嘆する口調のものも多い。晩唐の韋莊は、高官に有力な手づるをもたないゆえに科擧に落第したのだと嘆き（「下第題青竜寺僧房」）、同じころの盧駢もまた寿命だけでなく、「榮枯も亦た大だ偏れり」（「題青竜精舍」）と歌っている。寺院参詣の楽しみには、こうした壁画や題詩を見るそれも当然含まれていたはずである。一方、韓愈らが後の宰相牛僧孺を引きたてる際にも、この青竜寺の門への大書という方法を用いている（『唐詩紀事』卷三九など）。これは青竜寺を訪れる貴顕の数が多かったことを暗示するものとして注目される。

中唐の賈島は一時期、従弟ともされる詩僧無可と一緒に青竜寺に止住した（『唐才子伝』卷六、無可）。李嘉言の「賈島年譜」によれば、賈島は元和六年（八一二）、三十三歳の春、河南令の韓愈に初めて会い、同年の秋、韓愈に随つて都に入り、三、四カ月の間、青竜寺に住んだという。⁽²⁷⁾ 賈島の「青竜寺に題す」詩は、当時の著名な詩文の大家韓愈に認められて、将来に対する光明をわずかに見出した時の作であろうか。

碣石山人一軸詩

碣石山人 一軸の詩

終南山北数人知

終南山北 数人知る

擬看青竜寺裏月

青竜寺裏の月を看んと擬して

待無一点夜雲時

一点の夜雲無き時を待つ

碣石山人とは賈島の自号、終南山北とは都長安を指す。後半の二句は、あくまでも詩人としての孤高の道に固執しつつ歩もうとする強い決意をひめた表現のように思われる。一方、詩僧の無可はその後もしばしば青竜寺を訪れて修業したという。みずから「時に来りて此に於いて禪す」と詠んでいる（『題青竜寺縦公房』）。

ところで唐詩を参照すれば、詩人たちと交遊のあった青竜寺の僧侶の名をかなり知ることができ、資料の欠を補う好資料となっている。盛唐期には、曇壁上人（王昌齡・王維・王縉・裴迪）や操禪師（王維・裴迪）、帰一上人（岑參）などがあり、中晚唐期には、源（一作原）上人（居士元無可）、鏡公（馬戴・薛能）、縦公（無可）、雲顥法師（曹松）、空上人・貞（一作真）上人（無可）、印禪師（李洞）、師安上人（司空図）などを指摘できるが、その多くは事跡が不明のようである。ちなみに、寺のある新昌坊には、初唐の蘇頌そす、中晚唐の銭起・李益・白居易・李紳・姚合ようごう・牛僧孺・舒元興らが少くとも一時住んだ家があった（『唐兩京城坊攷』卷三）。

三、青竜寺歌詠の開始

盛唐の著名な王昌齡・王維・その弟の王縉・王維の詩友裴迪の四人が一緒につれだって、久しく禪寂する青竜寺の曇壁上人の僧房を訪れたのは、玄宗の天宝二、三載ごろとされ、そのときに作られた四人の同詠詩が作成年代をほぼ推定しうる青竜寺歌詠のはじまりとなっている。このとき、最年長の王昌齡は江寧（南京）の丞在任中であり、公用で一時帰京中のこととされる。かりに天宝三載（七四四）の作とすれば、王昌齡は四十七歳？（譚優学の説〔傳璇琮の説によれば約五十五歳〕）を筆頭に、王維は四十六歳、弟の縉は四十五歳、裴迪は二十九歳であった。また法兄の曇壁上人は当時の詩人たちからかなり思慕されていた高僧であつたらしく、裴迪は「吾が師 久しく禪寂し、世に在りて人

群を超ゆ」(「青竜寺曇壁上人院集」と評する。大曆十才子のうちに数えられる耿漳(一作司)と李端の二詩に見える「故曇上人」とは、おそらく今は亡きこの曇壁上人を指すだろう。耿漳は上人の死後、帰依すべき人が得られない嘆きを、「降竜(毒竜を折伏する僧、上人を指す)今已すでに去り、巢鶴(仏教信者、作者を指す)竟ついに何れにか従はん」と歌っている(「宿青竜寺故曇上人院」)。

江寧の大兄(王昌齡)の命により片石(大きく平たい石)に題したという王維の「青竜寺曇壁上人兄の院集」には長い序文が付され、盛唐期における青竜寺の状況をよく伝えている。

吾が兄、大いに蔭(木かげ)中を開き、物外に明徹す。(中略)(上人は)僧房に深居し、人里に傍俯す。高原陸地、下は芙蓉の池に映り、竹林果園、中には菩提の樹秀づ。八極、氛(きん)霧(き)霽(は)れ、万葉(ばんい)森羅万象、塵思(ちんし)む。太虚は寥廓(くわく)として、(終)南山、之が端倪(きわ)境界を為す。皇州蒼茫として、渭水、天地を貫く。経行(きんぎん)静かに散歩して身心を整える)の後、趺坐(ふざ)して閑、堂に升れば梵筵(ぼんえん)(清浄な宴席)あり、客に餌(くら)はしむるに香飯あり、起たずして遊覽し、風あらずして清涼なり。

釈清潭訳注『王右丞集』(統国訳漢文大成)の余論の条に「骨子を高处の二字に置き、言言句句、高处を離れず」と評されるごとく、この序文も、「高处 招提てら敞ひらく、虚空 詔なんぞ倪かき有らん」の句で始まる五言排律も、城内で最も高い楽遊原のゆるやかな南斜面に開ける青竜寺のたたずまいを適確に詠んでいる。王維の詩中にみえる「坐して看る 南陌ななの騎」の南陌とは、青竜寺の前(南)を東西に走る延興門大街(前述)を指すだろう。「起たずして遊覽し 風あらずして清涼なり」の言葉は、寺が見はらしのよい崇き岡に立ち、同じ上九の岡に立つ慈恩寺などとともに格好の避暑・遊覧の地であったことを示す。しかも繁華な城内にあるために、都市生活のざわめきや疲れから一時避難し閑適な気分を味わうのにふさわしい身近な名刹であった。王昌齡の同詠詩(30)に、

簷外含山翠

簷外えんがい 山の翠さびを含み

人間出世心

人間じんかん 出世の心あり

と詠まれるごとく、名利・栄辱・政争のうずまく都という典型的な「人間」に位置しながら、それを超脱した塵外の境として閑静・清浄な気分により一時ひたれる場所であり、当時の詩人・官吏たちにとっては、官僚生活の余暇に気軽に訪れ、隠遁的趣味性を充分満足させうる「霊境」(裴迪の詩)であった。王維らは法兄の曇壁上人との語らいを通じて「友弟」(兄弟愛、王昌齡の詩)を深め、しばしの法楽によいしれた。ちなみに、敬虔な仏教信者として知られる王維には、晩年の作と目される「夏日 青竜寺に過りて操禪師に謁す」(五律)という詩もあり、安史の乱における虜囚の恥辱をようやくふきつて到達した悟りの境地が表現されているようである。⁽³¹⁾

青竜寺はまた「竹森邃しんすいとして京都の最(第二)為り」(『長安志』卷八)といわれた慈恩寺に次ぐ「竹林」(王維の詩序)の豊かさを誇っていたかも知れない。王昌齡の同詠詩の「本来 清浄の所、竹樹 幽陰を引ぶ」の詩句をはじめとして、「安禪す 一室の内、左右 竹亭幽ゆうなり」(裴迪「夏日過青竜寺謁操禪師」)、「屢くを歛とどへて寒竹に入る」(郎士元無可「冬夕寄青竜寺源公」)、「寒房 竹月円まどかなり」(無可「青竜寺縦公房」)、「鶴は已すでに孫を生じ 竹は池に満つ」(李洞「贈青竜印禪師」)、「竹色 平地に連なる」(朱慶余「題青竜寺」)、「戸を閉じて寒竹に臨む」(耿漳「宿青竜寺故曇上人院」)などと歌われ、境内の清浄な雰囲気を一層深める効果を果たしたであろう。ちなみに、同じ新昌坊内の鬱蒼とした竹林としては、元和十年(八一五)、武元衡を殺した刺客が逃げこんだという裴向の「竹園」をあげることができる(『長安志』卷九)。今日では考えられないほど、当時の長安には緑濃き竹林が散在していた。

四、青竜寺の四季

ここで唐詩に詠まれた青竜寺の四季を少し探ってみたい。春風が香しき刹に吹き入るとき、ひとり遊んだ中唐の顧況は、朝の雨に洗われた境内の古木（老松か）に、春の鳥がさえずり、周囲を新緑につつまれつつ花吹雪の舞う風情を、

長廊朝雨畢 長廊 朝雨畢や

古木時禽囀 古木 時禽囀じきんさえず

積翠暖遙原 積翠せきすい 遙原を暖おほひ

雜英紛似霰 雜英 紛として霰あられに似たり

と歌い（時禽には春鶯も含まれるだろう、後引の白居易の詩参照）、友人と一緒に訪れた中唐の李益は、春色の浅く濃き樹が春のおだやかな日ざしを受けてきらめきつつ揺れ、南海から渡ってきた燕たちが巢作りのためか、しきりに木をかすめて飛びかうさまを、

揺光浅深樹 光を揺ゆす 浅深の樹

私木參差燕 木を私しんう 參差たる燕

と歌っている（「同王楚登青竜寺上方」）。

また劉長卿の「清明の日、青竜寺の上方（高所の寺院・僧房）、多の字を得たり」詩には、晩春初めのうららかな清明節のころ、快適な遊覧を楽しむために「遠近 人すべ都て至り、東西 山色多し」と詠んだあと、

夕陽留逕草

夕陽 逕の草に留まり

新葉交庭柯

新葉 庭の柯に交ず

と歌い、若葉の季節の到来を喜んでゐる。ちなみに、この詩は同時期の皇甫冉の「清明日青竜寺上方、賦得多字」としても伝えられ、この詩がいわゆる賦韻（二人以上の詩人たちがある限られた範囲内から韻字を分けとって競作すること）の作であることがわかるが、その詳細は不明である。詩人たちが青竜寺内の僧房に集まって楽しんだのであろう。その中には青竜寺の詩僧もまじっていたかも知れない。もっとも当時の寺院は、閑雅な詩酒の遊びの場としても盛んに用いられたが……。

皇甫冉の詩句は劉長卿のそれとやや異なり、「遠近人都至」を「遠近水声至」に作る（『全唐詩』二四九）。「東西山色多」との対句としては、むしろこの方がよい（五律の領聯）。とすれば、境内のなかには清冽な水が豊かに流れ、竹のしだれる芙蓉池（王維の詩序）にそそいでいたであろう。李端の詩に「芭蕉高くして自から折れ、荷葉大にして先づ沈む」（病後遊青竜寺）とあり、前引の李洞の詩にも「鶴は已に孫を生じ 竹は池に満つ」とある。

寺の初夏は清和の気をたたえ、緑陰が日ごとに濃くなった。白居易の「青竜寺の早夏」詩には、春を惜しむ残鶯の意思もいつしかとだえ、涼しい木陰の多くなるさまを、

残鶯意思尽

残鶯 意思尽き

新葉陰涼多

新葉 陰涼多し

と歌い、奇峰のごとき夏の雲が見られるようになった。王維の詩序（前引）に「風あらずして清涼」とあるごとく、むしろ暑い長安城内にありながら別天地のような涼やかさであり、まだ夏のうちに早くも忍びよる秋の気に感じて蟬がしきりに鳴きさわいでいた（裴迪「夏日過青竜寺謁操禪師」）。盛夏、涼しい寺を訪れて僧と語りいつつ静かに茶を飲む

楽しみは格別であつた。晩唐の薛能の「夏日 青竜寺に僧を尋ぬ」二首（其二）には、

涼風盈夏扇

涼風 夏扇に盈ち

蜀茗半形甌

蜀茗 形甌に半ばす

と歌われる。蜀茗は蜀（四川省）の名茶、形甌は茶杯・茶碗の意。北方における飲茶の風習は玄宗の開元年間、禪院から起こり、中晩唐期には、各地に茶を煎じて飲ませる茶坊・茶荘も出現していた。⁽³³⁾ 青竜寺の場合、寺内の「深井」（後引の郎士元の詩）から汲みあげた清澄な山泉が使われたことであろう。新昌坊付近の「井泉は清くして甘」い（姚合「新昌里」）が、中唐の殷堯藩の「新昌の井」に「轆轤千転 筋力を勞す、甘泉を待ち得て人を渴殺す」と詠まれるごとく、深井の甘泉を汲みあげるには、のどのかわきにたえかねるほどの長い時間がかかった。

寺の秋は柿の紅葉に満ちあふれ、その「赤実果」（『説文』六上、柿）は寺の名物として参詣人に出されることもあったらしい。憲宗の元和元年（八〇六）九月に成る韓愈の「青竜寺に遊び、崔大補闕（群）に贈る」詩は、「万株の紅葉の満つるに値って」、眼くるめき、赤い気があたり一面にただよう紅樹の風情を歌う傑作である（作者三九歳）。韓愈は寺をおおう紅葉のありさまを、夏の神である炎官が真紅の火傘を広げたようだという、あるいはまた、

然雲燒樹火実駢

雲を然やし樹を焼いて火実駢り

金烏下啄赭虬卵

金烏下り啄む 赭き虬の卵

と歌う。前句は赤い珊瑚（火実）のように鈴なりになって樹を焼き雲を燃やさんばかりの柿の実をうたうが、特に「太陽に住む神禽黄金色のカラス（三足鳥）が地上に舞いおりつつ虬の紅い卵をついばむ」という表現はまさしく奇想と評しえよう。卵とは柿の紅い実を指すが、金烏とは柿の紅葉を見たのであろうか（森槐南『韓詩講義』下）。また透明な頗黎（ガラス・水晶の類）の器に盛られた、靈液したたらんばかりの美味の柿を、寺僧から御馳走になったことを、

二三道士席其間 二三の道士 其の間に席し

靈液屢進頗黎盤 靈液屢と進む 頗黎の盤

と歌い（道士は有道の士で高僧）、柿の紅い光が顔にうつって、急に紅顔の美少年になったような気がしたという。

この詩には、実は紅葉とその実が柿のそれであると明言した句はないが、宋代以来、柿のそれを指すとされ、『広群芳譜』巻五八、柿の条にも引かれる。北宋の蘇軾はあるとき、「鄭虔、青竜寺に寓し、貧しくして紙無く、柿葉を取りて書を学ぶ」という「小説」の記事を読んで、詩中の赤色は柿のそれであることを悟ったといい（『東坡題跋』巻二）、森槐南・久保天随の両訳注書はこの説に従い、『東坡の發明』（久保の書）とするが、この説にはやや疑問がある。鄭虔が柿の落葉を紙の代用にした話は、一般に慈恩寺のこととされる。慈恩寺の柿は法力上人手植えのもの（とされ、白居易の詩にも見える）。従って「長安の諸寺は柿多し」（馬永卿の語）とも考えられ、白居易が間借りした昭国坊の王家は「柿樹 緑陰合す」（「朝婦書寄寄元八」とされ、長安の城南にも柿の木が多かった（鄭谷「遊貴侯城南村墅」）。柿の木には、寿ながし、陰多し、鳥の巢なし、虫なし、霜葉玩ずべし、嘉き実、落葉肥大という七つの長所があり（『酉陽雜俎』前集卷一八）、存外愛された木であるらしい。「落葉肥大にして、以て臨書すべし」という宋の蘇頌の語は、鄭虔の逸話を踏まえての発言であろう。蘇軾の發明になるかどうかはひとまず置き、青竜寺が柿の名所であったことは充分考えられる。中唐の羊士諤は、蒼苔と紅い霜葉とが照りはえるみことな色彩対照の妙を、「十畝の蒼苔 画廊を遶り、幾株の紅樹か 清霜を過ぐ」（王起居独遊青竜寺玩紅葉、因寄）と歌っている。また朱慶余の「青竜寺に題す」という詩も、たそがれどきの美しい秋景を絵画的に歌う。

青山当仏閣 青山 仏閣に当ひ

紅葉満僧廊 紅葉 僧廊に満つ

竹色連平地 竹色 平地に連なり

虫声在上方 虫声 上方に在り

詩中の青山とは、長安の南につらなる二〇〇〇メートル級の高峻な終南山を指し、「登眺の絶勝」(張礼「遊城南記」)を表す素材として、青竜寺の歌詠にはしばしば詠まれる。王縉の「林中 空寂の舎、階下 終南山」の句を(41)はじめとして、「一夕曾て留宿す、終南 揺落の時」(薛能「題青竜寺鏡公房」)、「青竜寺裏 三門の上り、立つは南山の(42)為にして僧の(43)為ならず」(林寛「長安遺懷」)などと歌われるが、特に清澄な晩秋になると、

南山逼冬転清瘦 南山 冬に逼りて転清瘦

刻画圭角出崖窾 圭角を刻画して 崖窾を出だす

と歌われるごとく、すっかり落葉して、かどばった断崖や洞窟(窾)の姿があらわとなり、一種荘嚴な気分を与えたりしい。劉得仁も「高きより視れば終南秀で、西風 閣を度りて涼し」(「秋晚与友人遊青竜寺」)と歌う。ちなみに、宰相の令狐楚の推薦を受けて上京しながら、元稹の反対にあって仕官の熾烈な望みを絶たれた張祜は、

人人尽到求名处 人人 尽く名を求むる処に到るも

独向青竜寺看山 独り青竜寺に向て山を看る

と歌い(「題青竜寺」)、人間の名利や時代の変遷をよそに時空を超越して嚴然としてそそりたつ終南山の偉容を注視することによって深い挫折感を鎮めようとするかのである(長慶元年「八二一」、四十歳ごろの作)。(42)

「夕磬 城霜下り、寒房 竹月円かなり」(無可「題青竜寺縦公房」)と歌われる晩秋がすぎると、参詣人の足も次第に遠のき、寺内は深い静寂につつまれた。薛能はふぶく冬の夜の僧舎の寂寥を、「孤燈 岡の舎掩られ、残磬 雪の風吹く」と歌い、厳しい寒気のために折れる老樹もあったという(「題青竜寺鏡公房」)。また中唐の郎士元も「冬の夕、

青竜寺の源公に寄す」詩のなかで、冬の夜の静謐さを、

高松 残子落 高松 残子落ち

深井 凍痕生 深井 凍痕生ず

罷磬風枝動 磬を罷めて 風枝動き

懸燈雪屋明 燈を懸けて 雪屋明るし

と歌っている。この詩は無可の「青竜寺の原（一作源）上人に寄す」（『全唐詩』八一三）とほぼ同じであるが、无可の詩には高松を「高杉」に作る。いずれとも決めかねるが、劉得仁の「青竜寺の僧院」詩にも「高松」が見えるので、ひとまず冬の風にゆれ落ちる松カサの描写と考えたい。同じ新昌坊内には、呂逸人りいつじん手植えの、竜の鱗うろこさながらの老松もあり、白居易の自宅にも松が植わっていた。ちなみに、寺内から眺めた月下の都の雪景色は、舒元興の「雪下り月を望む記」のなかに美しく書かれている。「白玉みやくの京」と化したきらめく長安城の姿である。

〔註〕

- (1) 青竜寺が新昌坊に位置したことの詳細は、後掲の加地哲定の論文参照。
- (2) 以下四人の（ ）内は各自の灌頂の年。
- (3) 王溥『唐会要』卷四八や宋敏求『長安志』卷九では一年早い開皇二年のこととする。
- (4) 『考古』一九七四―五に収める「唐青竜寺遺址発掘簡報」に拠る。
- (5) 『唐会要』卷四八、寺の条では、新城公主とする。二人とも太宗の娘である。
- (6) 『大正新修大藏經』第五〇卷所収。
- (7) 『大正新修大藏經』第五五卷に収める「靈巖寺和尚（円行）請来法門道具等目錄」。

- (8) 福山敏男「唐長安城の東南部―呂大防長安図碑の復原」(『古代学』二卷四号) 参照。
- (9) 平岡武夫「唐代の長安と洛陽」地図の解説(二四頁)「唐代研究のしおり第七」参照。
- (10) 陝西省文物管理委员会「唐長安城地基初步探測」(『考古学報』一九五八―三) など。
- (11) 註(9)の書の七四頁。
- (12) 但し武伯倫「唐代長安東南隅(上)」(『文博』一九八四―一)は、この村名を玄宗期、芙蓉園に通じる夾城の造営にちなむものとする。
- (13) 常盤大定の後掲論文に、大中六年(八五二)に再興されたとするが、論拠不明。
- (14) 宮崎市定「留唐外史」参照。
- (15) 小野勝年「長安の菩提寺とその周辺」(『龍谷史壇』六八・六九合併号) など。
- (16) 『密教研究』七一(高野山大学) 所収。
- (17) 土井健司「晚唐詩人曹松の生涯と詩」(創価大学『文学部論集』二卷二号)。
- (18) 『宗教研究』新二卷二号所収。
- (19) (嘉慶) 咸寧県志』卷四所収。
- (20) 前掲の加地哲定論文も「今の石仏寺の辺が古の青竜寺の遺蹟だと断定する」という。
- (21) 註(10)以外に、宿白「隋唐長安城和洛陽城」(『考古』一九七八―六)や馬得志「唐代長安与洛陽」(『考古』一九八二―二)。
- (22) 宮崎市定「漢代の里制と唐代の坊制」。
- (23) 石田幹之助「当壚の胡姬」。
- (24) 『全唐文』卷七二七。
- (25) 『太平広記』二五八所収「桂苑叢談」に詳しい。なお権徳輿の「早春青竜寺致斎……」詩の注(『全唐詩』三二五) 参照。
- (26) 上海古籍出版社刊『長江集新校』所収。
- (27) 布目潮風・中村喬「唐才子伝之研究」(汲古書院改訂再版) 二六七頁の「来東都、旋往京居青竜寺」の訳文は誤訳。「旋」

は「回りめぐる」ではなく、まもなくの意。

- (28) 譚優学「王昌齡行年考」では天宝三載、四七歳の作とし、傅璇琮「王昌齡事跡考略」では天宝二、三載の作とし、李云逸『王昌齡詩注』では天宝三載の作とする。

- (29) ひとまず六九九年生誕説に従う。

- (30) 「同王維集青竜寺曇壁上人兄院五韻」。

- (31) 入谷仙介『王維研究』（創文社）参照。

- (32) 津田左右吉「唐詩にあらはれてゐる仏教と道教」（『津田左右吉全集』第十九卷）。

- (33) 植木久行『唐詩歳時記―四季と風俗』参照。

- (34) 錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』所引洪興祖の説参照（上海古籍出版社、一九八四年）。

- (35) 統国訳漢文大成『韓退之詩集』上巻。

- (36) 『新唐書』卷二〇二「文苑伝」や『太平広記』二〇八所引唐の李綽『尚書故実』など。

- (37) 『酉陽雜俎』続集卷六「寺塔記」下。

- (38) 植木久行『唐詩の風土』三六頁参照。

- (39) 註(34)の書所引。

- (40) 明の李時珍『本草綱目』卷三〇所引。

- (41) 「同王昌齡裴迪遊青竜寺曇壁上人……」。

- (42) 譚優学「張祜行年考」参照。

- (43) 王維「春日与裴迪過新昌里訪呂逸人不遇」。

※なお本稿は本書の編集方針に従って平易に訓読した（送り仮名のみ旧仮名）。また紙幅の都合上、注は簡略にした。

補記：北海道教育大学の妹尾達彦氏から、初校後、馬得志「唐代青竜寺」の論文（美乃美刊『空海入唐』所収）を教示されたが、内容上とくに訂正すべき点がないので補筆しない。妹尾氏の御厚意に感謝する。